

プラテュス *πλατύς*



◆巻頭言「患者中心の医療を支援するチームを保健科学研究所に結成しよう」	1
研究院長補佐 神島 保	
◆北大を離れるにあたって	2
退職のご挨拶 リハビリテーション科学分野 教授 境 信哉	
退職のご挨拶 創成看護学分野 講師 青柳 道子	
退職のご挨拶 生体応答制御医学分野(寄附分野) 特任講師 芳賀 早苗	
退職のご挨拶 創成看護学分野 助教 中村 真弥	
退職のご挨拶 リハビリテーション科学分野 助教 高松 泰行	
◆新任教員紹介	4
就任のご挨拶 データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任准教授 鈴木 哲平	
就任のご挨拶 医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑	
就任のご挨拶 データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任助教 上田 龍一郎	
◆同窓会便り①	5
沿革(簡易版)と活動報告のご紹介 同窓会 会長 岡田 一範	
◆協定締結・海外便り・国際交流の報告	6
北海道大学ー韓国ソウル大学校ータイマヒドン大学共同講義 Environmental Chemicals and Human Health (環境化学物質と人びとの健康)の開催報告 健康科学分野 教授 池田 敦子	
メルボルン大学訪問 国際連携室 室長 山内 太郎	
北海道大学ー韓国ソウル大学校Networking Roundtableの開催 健康科学分野 教授 池田 敦子	
FHS国際シンポジウム10周年とメモリアルBook 国際連携室 室長 山内 太郎	
◆特集1	9
オープンキャンパス報告(2022年8月7日~8日開催) アドミッション実施委員会 委員長 平野 美千代	
◆特集2	10
保健科学研究所公開講座「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」を開催 公開講座委員会 委員長 山内 太郎	
◆特集3	11
第1回北大・地球研連携協定記念シンポジウム開催報告 健康科学分野 教授 山内 太郎	
◆特集4	12
「ひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ不思議な細菌の世界2022ー 身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう!」(2022年12月4日開催) 実施報告 病態解析学分野 教授 山口 博之	
◆報告事項	13

患者中心の医療を支援するチームを保健科学研究院に結成しよう

研究院長補佐 神島 保



最近、医療の現場で「患者中心」という言葉が頻繁に聞かれるようになりました。かつては主治医が「この治療を行います」といえば、患者は「よろしくお願ひします」というしかないというイメージがありました。最近はずいぶん様子が変わってきているようです。患者は患者様と称され、自分の病気や病態を十分理解できた前提で、様々な治療法を、そのメリット・デメリットを含め説明を受け、その上で自身が自分に合っているものを選ぶことができるのです。インフォームドコンセントやセカンドオピニオンなど色々な言葉がありますが、要するに「患者中心」の医療というのは「自分の治療に主体的に参加し選ぶ」ことなのです。

個々の患者に関する診療情報(カルテ情報)は著増傾向にあります。私は放射線診断専門医として画像を読影し、依頼医が正しく理解できるように適切な医学用語を用いて報告書を作成し、膨大な画像からkeyになる参照画像を選択して添付します。そのような報告書は患者にとって理解が難しいため、主治医は、患者の健康上の問題の全てを把握することに努め、患者への丁寧な説明を試みるでしょう。ですが、多忙を極める現代の主治医にとって、画像情報ひとつをとっても、行き届いた説明は困難になりがちで、結局、患者は、程度の差こそあれ、病態に関する理解が不十分な状態で治療介入を受けるのが現状ではないでしょうか。自分が十分納得できるまでとことん付き合ってください「お医者様」はもういないのです。

それでも、患者が自分の状態を十分に説明してくれる存在を求めることは自然なことです。では、患者はそれをどこで得られるのでしょうか。私は、それが医療チームの役割となってきたように思います。画像診断、看護、臨床検査、リハビリテーションといった患者に強くかかわり、関連する情報を有する専門家がそれぞれの専門性や強みを生かしながら、患者が自分の状況を正しく理解することの手助けをすることが求められているのです。患者の多くは医療の専門家ではありませんので、できるだけ平易な言葉やイラストなどを用いて説明することが必要になります。ですが、これは「言うは易し」で、効率的に個別の患者の実情に合わせて適切な説明を実践することは困難です。それどころか、歴史的に患者への説明は医師固有の業務と見做されてきており、医者でなければ患者に説明することに前向きになれない足枷があります。ここにもタスクシフトが必要なのかもしれません。

患者が自分の病態を満足できるまで理解した上で適切な治療を受けたいというアンメットニーズに対し、患者と医療者を結ぶ複合的なインターフェースを作成することを提案します。目指すものは医療チームが患者用に提供する「自分の病気の理解を助ける個別化された手引書」と認識してもよいかもしれません。具体的には医療者側が患者に伝えたいメッセージを画像と平易な言葉(音声)で説明するような仕組みです。何をどのように伝えるかを工夫することで患者の満足度を飛躍的に向上できると思われま。簡便さと統一感を備えたプラットフォームの構築が重要な要素です。AIを駆使して自動的に説明資料を作成できると臨床現場での活用の幅を広げられるでしょう。北海道大学病院との協働が不可欠な研究テーマです。

独立行政法人の事業として、公共性が高く、国民生活にとって必要なサービスを高い自主性のもとに実現するために、患者中心の医療の理想に根差した共同研究テーマを設定し、成敗させることが保健科学研究院の構成員に求められているのではないのでしょうか。

退職のご挨拶

リハビリテーション科学分野 教授 境 信哉



この度、令和5年2月28日をもちまして、北海道大学を退職することになりました。年度途中の急な退職となりましたことをお詫び申し上げます。北海道大学には、医療技術短期大学部であった平成15年4月に着任し、約20年勤務いたしました。この20年間で振り返りますと、最初の10年間は激動の時代だったと思っております。着任してすぐの平成15年10月に医学部保健学科(4年制)が設置されました。その第1期生が卒業する予定の平成20年には大学院修士課程が設置され、平成22年には大学院博士後期課程が設置されました。さらに教員組織においては、大学院保健科学研究所という新しい構想に基づく大改編が行われました。これまでの医学部の所属から、大学院の所属、しかもその名称には「研究」と入っていることから、教員に求められていることは、学部教育だけでなく、大学院教育そして研究であるということを実感させられた時でした。この激動の時代は明治維新に少し似ているような気がしています。北大の他学部・大学院の研究力に早く追いつき追い越せという勢いがありましたし、さもなくば保健科学研究所・保健科学院・保健学科は存続できないというような、威勢のよい教員が少なくなかった気がしています。

そのような環境の中、私も周囲に置いていかれる訳にはいかないという考えを持つようになりました。私が専門とする作業療法学の領域では、学術論文の投稿や学術学会発表も日本語で行うことが普通であり、学会の規模によっては名誉なことでもありました。しかし、国際的な研究大学でもある北海道大学に短大から昇格して組み込まれたことは、まさに教員に対して

国際的に研究を発信していくことが求められていることを意味します。つまり、国際的な学術言語となっている英語で発信していかなければならないということです。その頃から私が携わる研究論文は、原則、インパクトファクター付(引用頻度から導かれたジャーナルの影響度指標)英文ジャーナルへ投稿することに決め、大学院生に対しても将来研究者になるためには避けて通ることができないことを伝え、その高いハードルを課すことにしました。大学院生はかなり大変だったことと思いますが、指導する私もかなり大変でした。幸いなことに大学院生が優秀だったお蔭で、我々の研究室は数多くの研究業績を積み上げることができました。優秀な大学院生は、様々な大学の教員となり(現時点で6名)、なかには非常に質の高い研究を自立して行える者も出てきました。私の指導が良いか悪いかは別として、優秀な研究者が育ったことは私の誇りであり、当時、寝る間も惜しんで研究に励んでくれた大学院生に感謝の気持ちで一杯です。このように後半の10年は、研究、大学院生指導に力をいれた期間だったと思います。

北大に在籍していた期間、多くの先生方、事務方、学生達に支えられてきたことを心より感謝しております。時には私の失態により教職員に多大なご迷惑をお掛けしたことも数回ございました。それでも、親身になって解決にご尽力いただいたことを嬉しく思っております。退職後は、かねてからの夢でもありました政治家の道に進みたいと思っております。末筆ではございますが、これまで私を温かく支えていただきましたリハビリテーション科学分野の皆様、企画戦略室の皆様、事務の皆様をはじめ、保健科学研究所の皆様、大学院保健科学院・大学院保健科学研究所の今後益々のご発展を祈念しております。

退職のご挨拶

創成看護学分野 講師 青柳 道子



この度、令和4年12月31日をもって退職することになりました。早いもので、平成18年4月に医学部保健学科看護学専攻助手として着任してから約17年もの月日が経ちました。その間に、大学院修士課程、次いで博士課程

が設置され、医療技術短期大学の卒業生として、母校の発展の過程に携われたことを大変うれしく思っております。私は病院、在宅での終末期がん看護・緩和ケアの臨床経験を軸として、教育、研究を行って参りました。北海道大学病院看護部の皆様と共に、院

内認定がん看護エキスパートナースの研修や資格認定の制度創設と研究に関わらせていただきました。また、修士課程ではがん看護専門看護師教育課程の発足から携わり、2人のがん専門看護師が誕生しました。その他にも、香港大学との学生交流事業など、北海道大学でなければ得られない貴重な経験を数多くさせていただいたことに、心より感謝申し上げます。

1月からは他大学の所属となりますが、これまでと同様に看護の教育、研究、社会貢献に邁進してまいりますので、引き続きご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いたします。最後になりましたが、皆様の益々のご健勝とご発展をお祈りいたします。

退職のご挨拶

生体応答制御医学分野(寄附分野) 特任講師 芳賀 早苗



平成25年より博士研究員として、また平成28年から寄附分野の特任教員として研究に従事致しました芳賀早苗と申します。

在任期間中は保健科学研究院をはじめ北大内外の先生や研究者の方々、学生さんなどに関わることができ、いろいろなことを学べたことを喜ばしく感じています。自分自身の本務についても、このような環境の中でいろいろ吸収したり考えたりでき

たことで、職務に就いた当初より年々、より広い視野で物事を考えることができるように成長できたと思っています。ただ同時に、様々な問題や苦難などにも遭遇し、これらを乗り越えることの難しさを痛切に感じた期間でもありました。どんな人生でも人それぞれの困難が伴うものですが、私自身は保健科学研究院での様々な経験を糧にして、苦境にも立ち向かっていくことができると思っています。

最後になりましたが、保健科学研究院の皆様へ心より御礼を申し上げますと同時に、皆様の今後益々のご発展をお祈りいたします。

退職のご挨拶

創成看護学分野 助教 中村 真弥



この度、令和5年3月31日をもちまして北海道大学を退職することになりました。この場をお借りして、一言ご挨拶を申し上げます。私は本学の医学部保健学科看護学専攻の4期生として入学し、平成28年から保健科学院の

修士課程、平成30年から保健科学研究院の助教として着任いたしました。多くの先生方とのお縁に支えていただき、教育・研究に携わる機会をいただけたこと

は、私にとって大変貴重な経験となりました。お力添えをいただきました保健科学研究院の先生方、大学事務系職員の皆様はこの場をお借りして深くお礼申し上げます。私の専門分野である助産学の発展において、研究力の向上は非常に重要であると考えております。これまでの経験を糧に、より一層研究活動に邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願いたします。

最後になりますが、保健科学研究院の益々のご発展と、皆様のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。

退職のご挨拶

リハビリテーション科学分野 助教 高松 泰行



この度、令和5年3月31日をもちまして北海道大学を退職することになりました。この場を借りて、ご挨拶を申し上げます。

右も左もわからない札幌での生活となりましたが、教職員の皆様に温かく迎えて頂き、楽しく、充実した日々を過ごすことができました。優秀な研究者、学生が集まる北海道大学で教育・研

究者としてのキャリアをスタートできたことは幸運であり、大きく成長させて頂きました。また、他部局の研究者との共同研究、海外での講義など貴重な経験を積むこともできました。この経験を活かして、より一層精進してまいります。これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後に、リハビリテーション科学分野をはじめ、保健科学研究院の皆様には厚く御礼申し上げます。皆様のご活躍、保健科学研究院の益々のご発展を祈念いたします。ありがとうございました。

新任教員紹介

就任のご挨拶

データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任准教授 鈴木 哲平



令和4年12月1日付で、データヘルスイノベーション分野の特任准教授にクロスアポイントメント制度で着任いたしました。本所属は北海道教育大学岩見沢校で、ヘルステクニクスやスポーツビジネスに関する講義を担当し

ています。

私は、本学の医学部保健学科放射線技術科学専攻の3期生(小笠原研究室)で、医療情報や医療経営に興味を持ち、小樽商科大学大学院ビジネススクールにてMBAを取得後、民間医療機関で経営企画スタッ

フとして勤務していました。保健科学研究院には、平成28年4月から平成31年3月の期間、健康イノベーションセンターの特任助教として勤務しておりました。現在は、医療・介護・健康情報を用いたビッグデータ解析に関する研究に取り組んでおり、主に自治体レベルでデータを用いた研究を行っております。

データヘルスは健康医療情報を活用し、効果的・効率的な保健事業を行うことを意味していますが、地域におけるその基盤は未だ十分に整備されているとは言えません。健康・医療情報学の視点から、地域の保健事業を支えていけるような研究に日々努めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

新任教員紹介

就任のご挨拶

医用生体理工学分野 講師 松谷 悠佑



令和4年11月1日付で医用生体理工学分野の講師に着任いたしました。私は本学保健学科の放射線技術科学専攻を卒業後、修士課程・博士後期課程を経て、博士号を取得し、日本原子力研究開発機構の研究員として放射線被ばくによる生体影響の研究を行ってまいりました。また、研究活動の中で、英国クイーンズ大学ベル

ファスト大学や伊国パヴィア大学にてトレーニングを受け、放射線に関する物理学や生物学など、様々な分野に関わる中で放射線研究に邁進してきました。

放射線は画像診断やがん治療にとって重要な役割を担っておりますが、同時に正常な組織への発がんも引き起こします。私の研究は、コンピュータの中で放射線動きを緻密に再現するシミュレーション技術の開発を行い、「目に見えない放射線が人体にどのような影響を与えるのか？」全貌解明を目指して研究を進めています。これまでの研究経験を活かしつつ、本学での

教育・研究に還元することで、医療や研究分野におけるリーダー育成など、微力ながら日々努めていきたいと考えております。

保健科学の発展に貢献できるよう尽力してまいりますので、何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

新任教員紹介

就任のご挨拶

データヘルスイノベーション分野(寄附分野) 特任助教 上田 龍一郎



令和5年2月1日付で北海道大学大学院保健科学研究院データヘルスイノベーション分野に特任助教として着任いたしました。

私は本学医学部保健学科検査技術科学専攻を卒業後、本学院修士課程を修了しIT企業にエンジニアとして勤務していました。修士課程ではソーシャルネットワークサービスのビックデータを扱った分析を行い、2020年から日本で感染拡大が

始まった新型コロナウイルスによる人々への心理的な影響度を調査する研究を行いました。データ分析の領域に意欲を持って取り組める実感を経た最中でこのような機会をいただけたことを大変嬉しく思います。

データヘルスイノベーション分野では凸版印刷株式会社の寄附講座にて、ヘルスケアデータ関連の研究実施及びサービスの提案に向けた取り組みを進めております。至らない点が多くございますが、保健学科研究院の一員としてヘルスケア領域のIT化に貢献ができるよう全力を尽くして参ります。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしく願いいたします。

同窓会便り ①

沿革(簡易版)と活動報告のご紹介

同窓会 会長 岡田 一範

今回から、同窓会で誌面をお借りできることになりました。現在会長を務めております保健・検査2期の岡田一範と申します。初回ですので、同窓会の簡単な紹介をさせていただきます。本会(北海道大学医学部保健学科・医療技術短期大学部同窓会)は、平成2年3月14日に、浅賀忠義先生(現・北海道大学名誉教授)を会長として「北大医療技術短期大学部同窓会」が発足したことにはじまります。その後、四年制への移行や大学院設立といった保健学科の発展にあわせ、会員数も増加を続けています。近く、「北海道大学大学院保健科学院・医学部保健学科・医療技術短期大学部同窓会」に改称予定ですが、とっても長いので、「北大保健同窓会」などの略称を思案中です。良い案があればお寄せください。

最近の活動として、卒業生への記念品贈呈に加え、コロナ禍で生活が困窮した保健学科学生への支援(生協電子マネーへのチャージ)や、不幸にも火災に見舞われた校舎への消火器寄贈などを行いました。今後は、卒業生名簿の整備を進めたいと考えております。

最後に、貴重な誌面を割いてくださった編集委員の先生方に御礼申し上げます。今後も、このような情報発信を通じ、皆さんに身近な存在として認識していただければ幸いです。よろしく願いいたします。



昨年のホームcomingデーで、消火器寄贈に対して保健学科から感謝状をいただきました！
(写真左：筆者、写真右：桜庭 聡 副会長(保健・作業3期)。

北海道大学－韓国ソウル大学校－タイマヒドン大学共同講義 Environmental Chemicals and Human Health (環境化学物質と人びとの健康)の開催報告

健康科学分野 教授 池田 敦子

保健科学研究院では、北海道大学環境健康科学研究教育センターと共同で、10月27日(木)から29日(土)に海外ラーニング・サテライトプログラム・大学院共通授業「HU-SNU-MU共同講義 Environmental Chemicals and Human Health (環境化学物質と人びとの健康)」をタイのマヒドン大学で開催しました。ソウル大学校 (SNU), マヒドン大学 (MU)との共同講義は今回で5回目となります。

本共同講義はCOVID-19の影響により一昨年は中止、昨年度はオンライン開催であったため、3年ぶりに対面での開催となりました。今回は初めてMUがホスト校となり、3大学に所属する教員9名、及び大学院生39名がバンコクに集まりました。環境化学物質の曝露評価や生体モニタリング等の基礎知識に加えて、大気汚染、室内環境、マイクロプラスチック、COVID-19とマスク使用、胎児期の化学物質曝露と子どもの健康、化学物質管理など、新しいトピックスも加わり、幅広い講義が提供されました。加えて、3大学に所属する大学院生の混合構成による8組が事前学習の成果を発表し、翌日にはタイの環境にやさしい伝統文化を学ぶワークショップを実施しました。保健科学院からは1名の博士課程大学院生が参加しました。本プログラムによる3大学のネットワーク形成

は、履修生の将来のキャリア形成においても大変有益と考えています。履修生からの評価も高く、来年度も参加したいという希望があり、今後も継続して講義を提供していく計画です。



グループワーク



タイの伝統文化を学ぶ

参加者の声(保健科学コース博士課程2年 曾 怡)

この授業に参加したことで、非常に貴重な経験を得ることができました。まず、3大学の先生方による最新の研究に関する内容豊富な講義を受け、環境化学物質と人々の健康との関連についての理解を深め、研究視野を広げることができました。また、5カ国(日本、中国、韓国、タイ、ミャンマー)の学生たちと一緒にグループワークも行いました。それぞれの専門知識を活かして、健康被害、地域事例、曝露経路、生物毒性、対応策などの観点から、有害金属である砒素に関するプレゼンテーションを行いました。英語が母国語でない方が多数でしたが、温かい笑顔が絶えず、円滑なコミュニケーションをとることができ、異文化・異分野交流の良い経験となりました。さらに、参加者と一緒にタイの伝統文化を学び、本場の料理に触れ、忘れられない大切な思い出もできました。現地で仲良くなった友達とは、授業終了後も連絡を取り続けています。次回は北海道大学が主催なので、参加する機会があれば、ご来訪される先生と学生を温かく迎えたいと思っています。COVID-19パンデミック以降、初めての海外渡航でしたが、色々とお支えくださった皆さまに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました!



修了証、グループメンバーとともに



グループ発表の表彰式：準優秀賞に輝く

メルボルン大学訪問

国際連携室 室長 山内 太郎

2022年11月19日から23日、総長、理事、部局長ら総勢10名でオーストラリアのメルボルン大学を訪問しました(参考:『北大時報』2022年12月号P.41: https://www.hokudai.ac.jp/pr/pdf/jihou_22_12.pdf)。メルボルン大学は北大の戦略的パートナー校であり、この度の訪問で、更新時期を迎えていた大学間交流協定、学生交流覚書の更新に加えて「Research Partnership Agreement on the Hokkaido-Melbourne Joint Research Workshops Fund(北海道・メルボルン研究連携合意書)」の締結を行いました。また、ピーター・ドハティ感染免疫研究所(Peter Doherty Institute)、Bio21研究所、メルボルン・コネクト(Melbourne Connect)などいくつかの施設を全員で視察しました。

今回の訪問の先駆けとして、2022年3月8日に北海道大学とメルボルン大学の共同オンライン会議「Virtual Conference on Healthy Ageing」

(<https://www.global.hokudai.ac.jp/blog/virtual-conference-on-healthy-ageing/>)が開催されました。保健科学研究院からは、#1. Living Environment for Health Aging(健康科学分野 池田教授)、#2. Allied Health and Healthy Aging(リハビリテーション科学分野 澤村講師)の2つのセッションに教員が参加し、発表を行いました。

今回、部局間協定を視野に入れてSchool of Health Sciencesの学科長(Bruce Thompson教授)、リハビリテーション科学のカウンターパート(Marianne Coleman博士ほか)、看護学(Stephen McKeever博士)、国際保健学(Richard Chenhall教授)や先住民の健康(Aaron Corn教授)の教員・研究者と面談、施設見学を行いました。全学の行事も多く、部局に関するコミュニケーションは1日のみと限られましたが、充実した時間となりました。

これまで、アジアの健康課題に取り組むという方針の下に、アジア、東南アジアの研究機関と協定を結んできましたが、オーストラリアとも部局間協定を結び、国際共同研究や学生・教員交流を展開していきたいと考えています。



Photo by T. Uemura



北海道大学—韓国ソウル大学校Networking Roundtableの開催

健康科学分野 教授 池田 敦子

2023年2月3日に韓国ソウル大学校公衆衛生大学院から18の教員が来札し、Networking Roundtable(交流会議)を開催しました。北海道大学からは受入を担当した医学研究院に加えて、保健科学研究院(教員5名:健康科学分野教授小笠原克彦、同山内太郎、同池田敦子、特任助教Rahel Mesfin Ketema、同上田龍一郎、博士研究員1名、大学院生1名)、環境健康科学研究教育センター、および工学研究院の教員が参加しました。両大学からの参加者自己紹介、およびそれぞれの組織と主要な研究紹介を行いました。90分という短い時間ではありましたが、相互の研究テーマが

共通するところで今後の共同研究を見据えた交流を行いました。保健科学研究院とソウル大学校公衆衛生大学院とは、これまで大学院教育において共同講義を開講する実績がありますが、今後の新たな協力・発展が期待されます。



参加者集合写真

FHS国際シンポジウム10周年とメモリアルBook

国際連携室 室長 山内 太郎

保健科学研究院は国際シンポジウム(FHS国際シンポジウム)を隔年で開催しています。当研究院の教員に加えて、海外協定校であるディポネゴロ大学[インドネシア]、台北医学大学[台湾]、チュラロンコン大学[タイ]、高雄医学大学[台湾]、香港大学[中国]から複数の研究者を招待して講演を行っています。2013年7月5日の第1回目を皮切りに、これまで5回のシンポジウムを開催しており、早いもので来年度には10周年を迎えます。

過去5回の国際シンポジウムを下表にまとめました。それぞれの詳しい内容については広報誌プラテュスの過去記事に掲載していますので、ご参照いただければと思います。2015年の第2回FHS国際シンポジウムからは、保健科学院の大学院生によるポスター発表ならびに英語による概要説明(1分間のショットガン・プレゼンテーション)のセッションが加わり、大学院生がより主体的に参加できるという意味でも内容がグッと充実しました。また、2021年の第5回FHS国際シンポジウムは、新型コロナウイルス感染症拡大のため、オンラインで2日間開催するという初の試みを行いました。オンラインのよさを活かして講演を画面録画し、一部を保健科学研究院の公式YouTubeチャンネルで公開しています(URL：<https://www.youtube.com/playlist?list=PL83W9K0RKbnvZFJti2n4zj0Frjqq1861C>)。

本年度、国際連携室では、海外協定校との10年間に及ぶ交流を振り返りながら今後の結びつきをより一層強くしていくことを目的に、FHS国際シンポジウム10周年を記念したメモリアルBookを制作しました。書籍は以下のような内容で構成されています。

- ・FHSの思い出(研究院長、実行委員長、海外招待研究者)
- ・各回の国際シンポジウムのプログラムと招待講演者の発表要旨
- ・優秀ポスター発表賞(大学院生)
- ・データ分析(5回の国際シンポジウムの傾向と遷移)

この書籍の刊行により、研究・教育双方において協定校との国際交流をますます深めるとともに、来年度に開催する第6回ならびにそれ以降のFHS国際シンポジウムの発展と成功につなげていきたいと考えています。

保健科学研究院の公式ウェブサイトでもメモリアルBookのPDFを公開しています(URL：<https://www.hs.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2023/03/FHSbook.pdf>)。英語の書籍となりますが、海外協定校の研究者からご寄稿いただいたシンポジウムや来札の思い出などは、堅苦しくなく楽しく読んでいただけることと思います。また、国際交流の雰囲気を感じていただける写真も随所に掲載していますので、ご関心ある方はぜひご覧ください。

FHS国際シンポジウム開催概要

	開催日	開催地	テーマ	参照記事
第1回	2013年7月5日	医学部臨床大講堂	Evolving Health Sciences in Asia	プラテュス第11号
第2回	2015年7月3日	保健科学研究院	Gazing into the Future of Health Sciences in Asia	プラテュス第16号
第3回	2017年7月7日	保健科学研究院	Hitch our wagon to a remedy!	プラテュス第19号
第4回	2019年7月5日	保健科学研究院	Putting the Pieces Together: Creating A New Era of Health Sciences in Asia	プラテュス第23号
第5回	2021年 9月17-18日	オンライン	Look for the Silver Lining in the Post-Pandemic Health Sciences	プラテュス第27号

※プラテュスの過去記事はこちらからご覧いただけます→ <https://www.hs.hokudai.ac.jp/publicity/>



FHS国際シンポジウム10周年メモリアルBook(2023年3月刊行)

オープンキャンパス報告(2022年8月7日～8日開催)

アドミッション実施委員会 委員長 平野 美千代

今年度のオープンキャンパスは2年ぶりの対面開催となりました。COVID-19感染拡大前、本学科のオープンキャンパスは2日間で1,000名近くの来場がありました。今年度は感染対策を講じた上での実施となり、各日午前・午後の参加人数を100名、2日間の定員を400名とし、先着順の予約制としました。あわせて、個別相談会も予約制としました。オープンキャンパス、個別相談会ともに早期に定員に達し、多くの方が本学科に興味関心をお寄せくださいました。図1に示すとおり、参加者の多くは高校生であり、高校2年生が46%でした。当日、来学できなかった人もオープンキャンパスの内容を共有できるよう、本学科公式You tubeチャンネルにオープンキャンパスで実施した学科紹介と5専攻の紹介をアップロードしています(URL : <https://www.youtube.com/channel/UCJLmk4xK3QvPuvuU2CgPNCg>)。

オープンキャンパスでは、学科紹介、専攻紹介後に専攻探訪を実施しました(写真1)。今年度の特徴の一つは、参加者が興味のある二つの専攻を選び、その専攻が実施する専攻探訪プログラムに参加することでした。進学を希望する専攻の他にもう一つ専攻を探訪することで、5専攻を有する本学科の特徴を理解する一助になっていました。参加者からは「希望の専攻のみ参加できれば充分だと思っていましたが、他の専攻も参加できて視野が広がりました」「二つの専攻探訪プログラムに参加できるシステムが良かった」「自分が志望している専攻以外の講義も十分に楽しめた。視野が広がった」等の感想がありました。専攻探訪プログラムは表1のとおり、講義、実習、体験等を通

して各専攻の特徴をわかりやすく学べる内容になっています。経験豊富な教員陣の講義や各種学習教材を通じた体験型の学習は心躍る内容であり、参加者の満足度は高かったです。専攻探訪のプログラムによっては、学部生や大学院生と直接話ができ、在校生からの生の声は高校生の心に残る貴重な体験になったようです。

校舎で「大学」の雰囲気味わいながらの講義、実習を通じた学習体験や、教職員や在校生との交流は、参加者の本学科への志望の意識を高める機会となりました。「学科への興味がわきました」「実際に北大にきたのは初めてです。すごくすてきなと思ったし、私も『北大生』になってみたいです」「専攻探訪に参加して絶対北大に入りたいと思いました」等の多くの感想をいただきました。オープンキャンパスに参加くださった皆様、将来、北海道大学医学部保健学科の学生として一緒に学べることを教職員一同楽しみにしております。次年度も保健学科の魅力が伝わる、そして、参加者が楽しく参加できる内容を企画していきたいと考えております。興味関心のある方は、ぜひ、保健学科のオープンキャンパスにお越しください。教職員一同、皆様のご参加をお待ちしております。

図1 オープンキャンパス参加者 (アンケート回答者331名)

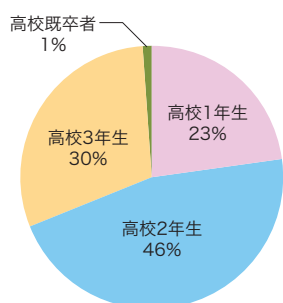


写真1 2022年度オープンキャンパスの様子

表1 2022年度オープンキャンパス専攻探訪プログラム

8月7日	看護学専攻	放射線技術科学専攻	検査技術科学専攻	理学療法学専攻	作業療法学専攻
午前の部	大学での講義を覗いてみよう: "産み育てる"看護を体験!	放射線の身体への影響について	ようこそ不思議な細菌の世界へ	北大理学療法学専攻での生活、 学び、研究について知ろう	人の骨格、脳の標本を見てみよう
午後の部	看護のお仕事:人々の健康を守るための取り組み「アルコールパッチで自分の体質を知ろう!」	ラジエーション・ハウスへようこそ-放射線技師への道-	ようこそ不思議な細菌の世界へ	北大理学療法学専攻での生活、 学び、研究について知ろう	障害者の運動支援と ドライビングシュミレーター
8月8日	看護学専攻	放射線技術科学専攻	検査技術科学専攻	理学療法学専攻	作業療法学専攻
午前の部	感染症のある人への看護を体験しよう	放射線の身体への影響について	大学で学ぶ、はたらく細胞	北大理学療法学専攻での生活、 学び、研究について知ろう	作業療法はこころの病に どのように貢献できるか
午後の部	身体のサインを読み取る	体内で動く腫瘍を狙い撃ち!! ~陽子線治療の世界~	大学で学ぶ、はたらく細胞	北大理学療法学専攻での生活、 学び、研究について知ろう	日本のメンタルヘルスを守る 作業療法士の仕事とは?

保健科学研究院公開講座「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」を開催

公開講座委員会 委員長 山内 太郎

保健科学研究院では毎年11月3日(文化の日)に、「ようこそ!ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、公開講座を開催しています。本年度も3名の若手研究者が各々専門とする研究をわかりやすく紹介しました。振り返れば、一昨年2020年度は、感染症拡大のためオンラインによる開催となりました。昨年2021年度は、対面とオンラインによるハイブリッド形式で行いました。そして2022年度は、従来の対面式に戻して開催いたしました。感染症の終息は先が見えず、参加者は例年よりも少数となりましたが、37名の方にご参加いただき、盛会のうちに終わることができました。



公開講座委員長による挨拶

はじめに、福永久典准教授が「『両刃の剣』放射線の生体影響」と題して、X線の発見後に伴う人類への恩恵と明らかとなった生体影響、放射線が精子形成に及ぼす影響(放射線不妊)について、最新の研究成果や今後の課題などを交えながら講演しました。

続いて、近藤祥子准教授が「不妊治療あれこれとこれから」と題して、不妊治療の概要、妊娠に至るまでのステップを見ていながら、不妊治療がどのステップに対する治療になっているのか等について、生物学的な視点からお話しました。



近藤祥子准教授による講演の様子

最後に、田村彰吾准教授が「骨髄を理解し、骨髄を創る!」と題して、自身が骨髄を創りたいと思った経緯、骨髄を創るにあたり人工臓器がどういったものか、人工臓器開発の現状やみえてきた課題について、自身の研究チームによる調査内容などを紹介しました。

終了後のアンケートでは、勉強になった、分かりやすかった、もっと聞きたかった等々、ポジティブな感想をいただき、参加者の皆様から大変好評を博することができました。



田村彰吾准教授による講演の様子

今年度と昨年度の講演は、保健科学研究院の公式YouTubeチャンネルでご視聴いただけます(URL : <https://www.youtube.com/playlist?list=PL83W9K0RKbntjVCoHNiKIBTH3PCSAAtC3j>)。

今後も、時代を反映するようなテーマや、興味を持って参加いただけるようなテーマを設けて、公開講座を開催してまいります。動画の感想やご関心があるテーマなどがありましたら、ぜひお寄せください。

ポスターには以下のような情報が記載されています:

- 開催日時: 2022年11月3日(文化の日) 13:00開講(受付開始12:00)
- 会場: 北海道大学大学院保健科学研究院 E1棟1階 多目的室【札幌市北区北12条西5丁目】
- 参加費: 定員100名 (お申し込み締め切り: 10月20日(木) 18時00分)
- 講演内容:
 - 1 13:05-13:55 「両刃の剣」放射線の生体影響 (福永久典 准教授)
 - 2 14:05-14:55 不妊治療あれこれとこれから (近藤祥子 准教授)
 - 3 15:05-15:55 骨髄を理解し、骨髄を創る! (田村彰吾 准教授)
- お問い合わせ先: shomai@hs.hokudai.ac.jp
- 予約URL: <https://www.hokudai.ac.jp/hs/2022/>

第1回北大・地球研連携協定記念シンポジウム開催報告

健康科学分野 教授 山内 太郎

2022年4月、北海道大学と総合地球環境学研究所(地球研)[京都市, 所長: 山極壽一]の連携協定が締結されました。地球研は、地球環境問題を自然科学のほか人文科学・社会科学など総合的な観点から研究する国立研究所です。

地球研との協定締結において北大側の中心的役割を担ったのが、「北大FE(Future Earth/フューチャー・アース) コンソーシアム¹」です。保健科学研究院はコンソーシアムの中心的な部局であり、他の4部局(環境健康科学研究教育センター, 北極域研究センター, 北方生物圏フィールド科学センター, 先住民・文化的多様性研究グローバルステーション)とともにその活動を推進しています。

北大と地球研はともに地球環境研究・サステナビリティ科学の国際的研究プラットフォームであるフューチャー・アースの日本委員会²に参加しており、本学においては北大FEコンソーシアムが中心となって、国連持続可能な開発目標(SDGs)の実現に向けた社会の各層における取り組みに資することを目指しています。

北大と地球研の連携協定を記念して、2022年11月25日に合同シンポジウムを北大の百年記念会館で開催しました(聴講は動画ライブ配信)。パネルディスカッションでは両機関の執行部が率直な考えを意見交換する大変貴重な機会となりました。シンポジウムの

動画が北大公式YouTubeチャンネルで公開されていますので、ぜひご覧ください(URL: <https://www.hs.hokudai.ac.jp/archives/32088/>)。SDGsに関心がある方にもおすすめです。

来年は地球研に場所を変えて第2回目のシンポジウムを開催予定です。150年近い歴史を持つ北海道大学と、設立20年ほどのフレッシュかつユニークな地球研のコラボレーションに大いに期待するとともに、両機関のとくに若手の研究者が自身の専門分野を超えて世界の様々な課題や未来の地球について熱く議論できる場となることを願っています。

- 1 北海道大学FEコンソーシアム：
<https://hufec.arc.hokudai.ac.jp/>
- 2 フューチャー・アース日本委員会：
<https://japan.futureearth.org/>



挨拶をする北大・資金総長



挨拶をする地球研・山極所長

■ プログラム

● 第1部 挨拶・基調講演

- 挨拶： 資金 清博 北海道大学 総長
山極 壽一 総合地球環境学研究所 所長
- 基調講演： 北大発展の歴史とSDGs
横田 篤 北海道大学 理事・副学長
大学共同利用機関・地球研の共同研究と北大の連携
谷口 真人 総合地球環境学研究所 副所長

● 第2部 北大・地球研の研究紹介

- 2.1 地域課題の解決から地球環境問題にアプローチする
地域と子どもで創る未来のサニテーション
山内 太郎 北海道大学 大学院保健科学研究院 教授
Recognizing local knowledge and histories in contested
forest systems toward transforming global environmental
injustices
Wong, Grace Mun Yee 総合地球環境学研究所 准教授
コメンテーター：松田 素二
総合地球環境学研究所 プログラムディレクター
- 2.2 地球スケールから見る多様な地域社会
地球温暖化のホットスポット：北極域の課題解決に向けて
大塚 夏彦 北海道大学 北極域研究センター 副センター長
Too muchとtoo littleを解消した持続可能な窒素利用を目指して
林 健太郎 総合地球環境学研究所 教授
コメンテーター：山中 康裕
北海道大学 地球環境科学研究院 教授



パネルディスカッションの様子



集合写真

● 第3部 パネルディスカッション

- モデレーター：山内 太郎
パネリスト：資金 清博, 山極 壽一, 横田 篤, 谷口 真人

「ひらめき☆ときめきサイエンス—ようこそ不思議な細菌の世界2022—身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう!」 (2022年12月4日開催) 実施報告

病態解析学分野 教授 山口 博之

昨年度と同様に今年度も、コロナ禍の中で万全な感染予防措置を施し「ひらめき☆ときめきサイエンス—ようこそ不思議な細菌の世界2022—身の周りの細菌を増やして見て感じてみよう!」(募集人数20名)を2022年12月4日に実施しました。高校生18名(発熱などで2名が欠席)が参加し、教諭と保護者計3名も実施プログラムを見学しました。まず参加者と見学者全てに検温を施し発熱がないことを確認しました。講義と実施プログラムの説明は、200人を収容可能な大講義室(E棟1階多目的室)に参加者、引率の高校教諭そして保護者を分散させ着席させました。また4隅の窓を半開し、十分な換気を確保しました。マスクは、講義や説明を行う実施者を含め全員着用しました。冒頭の講演(「ようこそ不思議な微生物の世界2022」)では、身の周りに無数に存在する細菌や原生動物の生存様式や特徴について紹介し、プログラムで体験してもらったグラム染色の染色性の違いと細胞の壁構造や細菌進化との関連性について一緒に考えてもらいました。講義終了後は、同教室にて、ソーシャルディスタンスを確保した上で昼食の弁当を食べました。感染予防のために会話は厳禁とし、その代わりにオンラインで事前に録画した微生物授業を視聴してもらいました。昼食後は、第三実習室に移動し、感染予防措置についての説明を行なった上で使い捨ての防護着を着用してもらいました。実験を行う際には、大学院生

にティーチング・アシスタントとして参加してもらうことで、参加した高校生が院生から大学生活について直接話を聞く機会を設けました。実習室の実験台には、飛沫防止用のアクリル板を設置し、対面さらに横に座った参加者からの飛沫の暴露を防ぎました。また実習室の窓と入り口の扉を開け、さらに商業用サーキュレーターを稼働させることで換気に努めました。クッキータイムの菓子は、各参加者に個別梱包した袋を事前に配布しました。細菌培養には時間を要するので、培地は事前に参加者に送付しサンプリング後返送してもらい培養後、プログラム実施日に使用できるようにしました。またグラム染色を施した細菌標本からベストショットを各自のスマートフォンで撮影してもらい、また専用の顕微鏡写真撮影装置を用いて油浸系(1,000倍)にて撮影した高解像度の顕微鏡画像をUSBに保存し参加者各自に持ち帰ってもらいました。その後、大講義室に戻り、未来博士号の証書を受け取り、アンケートに記入してもらいプログラムは無事終了しました。細菌の菌体構造や進化さらにその生態についても楽しく考えてもらうことで、科学を探究する楽しさと醍醐味の一端を存分に味わってもらいました。最後に、実施プログラムをサポートしていただいた大久保講師と大学院生(森さん、今野さん、李さん)と留学生(張くん)の皆さんに深く感謝します。



令和4年度北海道大学医学部保健学科卒業研究優秀賞表彰者を決定

この表彰は、医学部保健学科4年次に在籍する学生で、保健科学における新しい研究課題を積極的に開拓し、優れた卒業研究を行った個人へ授与されるものです。

このたび右記の方々が表彰者と決定されました。

専 攻	氏 名
看護学専攻	足 立 華 連
看護学専攻	入 江 雪 子
看護学専攻	大 村 風 歌
看護学専攻	松 浦 千 佳
放射線技術科学専攻	佐 藤 圭 佑
放射線技術科学専攻	平 田 恒 太
検査技術科学専攻	大 西 健 太
検査技術科学専攻	益 子 真 明
理学療法学専攻	福 岡 秀 哉
作業療法学専攻	磐 淵 ゆめの

保健科学研究院研究助成制度対象者(令和4年10月～令和5年2月)

所 属 分 野	職 名	氏 名	備 考
基盤看護学分野	教 授	鷲 見 尚 己	1編
基盤看護学分野	助 教	大 橋 和 貴	1編(内1編20%以内) ^{※2}
創成看護学分野	教 授	蝦 名 康 彦	1編
創成看護学分野	准教授	平 野 美千代	2編
医用生体理工学分野	教 授	神 島 保	2編
医用生体理工学分野	教 授	石 川 正 純	2編
医用生体理工学分野	准教授	杉 森 博 行	2編
医用生体理工学分野	准教授	高 島 弘 幸	1編
医用生体理工学分野	講 師	松 谷 悠 佑	1編
病態解析学分野	教 授	石 津 明 洋	1編(内1編20%以内) ^{※2}
病態解析学分野	教 授	恵 淑 萍	2編(内1編20%以内) ^{※2}
病態解析学分野	教 授	山 口 博 之	1編(内1編20%以内) ^{※2}
リハビリテーション科学分野	教 授	千見寺 貴子	1編
リハビリテーション科学分野	教 授	遠 山 晴 一	1編
リハビリテーション科学分野	教 授	前 島 洋	1編
リハビリテーション科学分野	准教授	寒 川 美 奈	1編
リハビリテーション科学分野	講 師	澤 村 大 輔	2編(内1編20%以内) ^{※2}
リハビリテーション科学分野	講 師	吉 田 一 生	3編
リハビリテーション科学分野	助 教	石 田 知 也	3編
リハビリテーション科学分野	助 教	笠 原 敏 史	1編
リハビリテーション科学分野	助 教	越 野 裕 太	1編
リハビリテーション科学分野	助 教	宮 島 真 貴	1編
健康科学分野	教 授	小笠原 克彦	3編(内1編20%以内) ^{※2}
健康科学分野	講 師	SIDDABASAVE GOWDA B. GOWDA	1編(内1編20%以内) ^{※2}
健康科学分野	助 教	吉 村 高 明	1編

【研究助成制度】

- 対象：(1) 英文原著論文（査読有，IF有，first author）を執筆した教員
 (2) 英文原著論文（査読有，IF有）の corresponding author となった教員
 （ただし，(1) に該当する論文の corresponding author となった教員は除く）

助成の方法：論文1編につき10万円の研究費を対象教員に配分

- ※1 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位10%以内は20万円を追加配分
 ※2 掲載雑誌のランキングが当該カテゴリーにおいて上位20%以内は10万円を追加配分

研究助成採択状況(令和4年3月～令和5年2月)

所属・職名・氏名	団体	名称	題目
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典	公益財団法人 寿原記念財団	令和4年度寿原記念財 団研究助成	微細管重合反応に対する放射線影響 の生化学的検討
病態解析学分野 准教授 田村 彰吾	公益財団法人 寿原記念財団	令和4年度寿原記念財 団研究助成	巨核球造血微小環境の変化に伴う巨 核球サブセットの変遷解明
病態解析学分野 准教授 田村 彰吾	公益財団法人 ノーステック財団	札幌ライフサイエンス 産業活性化事業研究 発掘補助金	3Dプリンターを用いた人工組織血管 化デバイスの開発
病態解析学分野 助教 西端 友香	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	研究助成	AAVにおける抗GBM抗体産生メカ ニズム
リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	公益財団法人 秋山記念生命科学 振興財団	研究助成	細胞老化から解明するうつ病の脳内 慢性炎症メカニズムと新規治療法の 開発
リハビリテーション科学分野 教授 千見寺 貴子	科学技術振興機構	創発的研究支援事業 研究助成	細胞老化が形成するストレスレジエ ンスな細胞社会の解明
リハビリテーション科学分野 講師 澤村 大輔	一般社団法人 日本作業療法士協会	2023年度海外研修 助成	高齢者支援における国際共同研究の 開発
健康科学分野 教授 横澤 宏一	公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	研究助成	コミュニケーションの神経基盤-即興 音楽による非言語的対話の脳間相関 解析
健康科学分野 助教 吉村 高明	公益財団法人 ノーステック財団	若手研究開発補助金 ノースタレント補助金	人工知能を用いた前立腺癌に対する 非侵襲的診断支援技術の開発
博士後期課程 菊地 眞海	SOMPO福祉財団	研究助成	Healthy Agingのための地域ケア構 築にむけた「高齢者の地域を基盤とし た人々とのつながり観」の可視化と実 装に関する研究

受賞状況(令和4年11月～令和5年2月)

所属・職名・氏名	受賞・表彰名称等	受賞論文名・研究題目・受賞理由等
基盤看護学分野 教授 尾崎 倫孝 2022.11.4	第48回日本臓器保存生物医学 会学術集会 学会賞	演題:老化関連分子p66(Shc)による肝細胞内レドッ クス制御, 低酸素再酸素化傷害, 肝再生における役割 の検討
医用生体理工学分野 准教授 福永 久典 2022.11.20	アジア放射線研究連合 若手研究者賞 (AARR Young Scientist Award)	

人事異動(令和4年11月～令和5年3月)

●令和4年11月1日

(採用) 松谷 悠佑 医用生体理工学分野講師

●令和4年12月1日

(採用) 鈴木 哲平 データヘルスイノベーション分野特任准教授

●令和4年12月31日

(退職) 青柳 道子 創成看護学分野講師

●令和5年2月1日

(採用) 上田龍一郎 データヘルスイノベーション分野特任助教

●令和5年2月28日

(退職) 境 信哉 リハビリテーション科学分野教授

●令和5年3月31日

(退職) 吉田 倫子 創成看護学分野講師
 芳賀 早苗 生体応答制御医学分野特任講師
 中村 真弥 創成看護学分野助教
 高松 泰行 リハビリテーション科学分野助教

広報誌の名称 「プラテュス」の由来

保健科学研究院の玄関前には、大きな二本のプラタナスの樹があります。古代ギリシャの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリシャ語で「広い」を意味する platys(プラテュス、ギリシャ語では「πλατύς」と記す)に、その名が由来するとされています。本研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて「プラテュス」と命名しました。

【発行】 北海道大学大学院保健科学研究院広報室

〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

【連絡先】 医学系事務部保健科学研究院事務課庶務担当

電話 011-706-3315 / E-mail shomu@hs.hokudai.ac.jp

URL <https://www.hs.hokudai.ac.jp>